

2023

8

令和5年8月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻360号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

とまろお



公益財団法人



公益財団法人
さわやか福祉財団

思恩忌 夏

感謝の思いを込めて——



7月12～14日、これまで当財団の理念と活動に共感いただき、遺贈ご寄付をお寄せくださった皆様、また、財団の活動を支えてくださった方々を偲び、**思恩忌 夏**を執り行いました。

(本文42ページもご覧ください。)



さあ、言おう

2023年8月号

CONTENTS

2 新しいふれあい社会 実現への道

「いきがい・助け合いオンラインフェスタ 2023」

2週間にわたる連日多彩なプログラム 参加をお待ちしています

清水 肇子

4 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

地域のピンチをチャンスに変えて

住民有志による移動支援を実現

門馬地域送迎チーム（岩手県宮古市）

10 助け合い こんな活動やってます！

誰もが誰かの役に立って 地域みんなでハッピーに

憩の家 みち（静岡県牧之原市）

14 いきいき わくわく 子どもと一緒に地域で輝こう

ひと息ついて、つながって 「明日もぼちぼち頑張ろか〜！」

子育てアラサークル たまふら（大阪府茨木市）

18 「地域助け合い基金」 助成先のご紹介／状況のご報告

22 連載 31 老いの暮らしを創る

あと3年 福祉ジャーナリスト 村田 幸子

24 連載 人生100年時代を生き抜く知恵 ジェンダーの視点から 12

戦争の記憶 お茶の水女子大学名誉教授 袖井 孝子

新しいふれあい社会づくりに向けて

28 ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・ご寄付者の皆様のご紹介

29 NEWS&にゅーす

31 活動日記（抄）

㊦みんなの広場 / 投稿募集

㊧さわやかパートナー・『さあ、言おう』のご案内 / 表紙絵から

助け合いを広げよう！ 新・ひとりごと・大石 芳野

「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2023」

2週間にわたる連日多彩なプログラム

参加をお待ちしています

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

昨年まで3回にわたり開催した「いきがい・助け合いサミット」には、全国から大変多くの皆さんにご参加いただき、3つの全体シンポジウムと125の分科会を実施してきた。

「共生社会をつくる地域包括ケア く生活を支え合う仕組みと実践」と副題を付けて行ったこれらのサミットの究極の狙いは、「地域共生社会を実現する道を皆で拓こう」というもの。

共生とは、まさに共に生きること。誰もが本来持つあたたかなお互いさまの気持ちを自然に表せるように、皆がいきがいを持って助け合う地域共生社会をどう創っていけばよいのかについて、関連する多様な分野を代表するすばらしい方々にご登壇いただき、各テーマで議論して目指す考え方や取り組み方を提言としてまとめてきた。

そして、今年。これら提言を踏まえて、さらに各地域で実践していく際に参考にしてもらう機会として、「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2023」を2週間にわたり行っていく。サミット同様に、生活支援コーディネーターや協議体構成員をはじめ、助け合いの地域づくりをすすめる皆さんを対象に、改めて多く直面している課題をテーマとして取り上げていく。

助けたり助けられたりする住民自身の視点から考えるというのもサミット同様、変わらない。

地域づくりには多様な要素が関わっており、どこにも当てはまる回答というのはほとんどない。だからこそ目指す方向やプロセスが大切であり、知恵や工夫を持ち寄り、情報を共有し、課題解決に向けた意欲を養えるような場として皆さんが考えるお役に立てればと願っている。

オーブニングフォーラムは、地域共生社会づくりの方向性と現在地、そして多様な取り組みを共有し合うもので、クロージングフォーラムでは、重要課題である子どもの育ちを地域でどう支えるかを焦点としている。また、多くの個別テーマで「学ぼう編」と「語ろう編」の2コマを設定しているので、関心あるテーマを自由に選んで参加してほしい。「学ぼう編」はいわば基本編であり現在の課題確認とヒントとなる情報を得るプログラムで事前収録によるもの。「語ろう編」は実践応用編として双方向参加型のライブ配信で行い、現場で課題に直面している実践者向けとなる。テーマにより事前アンケートやチャット、ワークショップ等も採り入れて実施する予定だ。

さらに、いきがい・助け合いを地域に広めていこうという人たちが集まるフェスタ（祭り）として、各登壇者同様にすばらしい皆さんから応援メッセージも寄せていただく予定だ。各専門の立場から今の課題を踏まえて大切なこと、どう進めば良いか等を自由に語ってもらう、いわば特別プログラムで、こちらもぜひご期待ください。

そして今回のフェスタでは、頂戴する参加費と同額を、当財団の「地域助け合い基金」に、いわば寄付として積み増しして全国の地域活動応援に活用させていただく。つまり、皆さんの参加が増えれば基金の原資額も増える。チャリティーフェスタでもある。皆さんの参加そのものが地域活動の応援にもつながります。ぜひ多くの皆さんのご参加をお待ちしています。



地域のピンチをチャンスに変えて 住民有志による移動支援を実現

かどま
門馬地域送迎チーム（岩手県宮古市）

地域課題の一つとして、真っ先にかかることの多い高齢者の暮らしの「足」。宮古市門馬地区では、地域を走るバスの減便を機に、住民有志と生活支援コーディネーター（SC）が危機感を共有し、行政のサポートも得ながらみんなで知恵を絞って、移動支援の活動を創出。その過程を取材しました。

（取材・文／城石 眞紀子）

急行バスの大幅減便が
地域に危機感をもたらす

平成の大合併で2010年に宮古市に編入合併された旧川井村。門馬地区

はその最西端の山間部にある120世帯、200人ほどが暮らす高齢化率57%超の限界集落である。そんな同地区内で、高齢者らの暮らしの足として、マイカーボランティアによる移動支援を行っている住民グループが「門馬地域送迎チーム」だ。立ち上げのきっかけになったのは、地域の重要な足だった岩手県北バス「106急行バス」の路線変更。宮古

市と盛岡市を結ぶ国道106号が横断する門馬地区では、これまで1時間に1本程度の便が地区内の複数のバス停に停車し、国道の「黒沢」バス停まで行けば、盛岡にも宮古市中心部にも容易に行くことができていた。ところが、東日本大震災の復興支援道路として整備が進んでいた「宮古盛岡横断道路」が21年3月末に開通するのに伴い、急行バスの多くが特急バスに格上げされ、地域の集落を通らずに高速化されることになったのである。

横断道路開通の半年前にバス会社から提示されたこの方針が、地域に大きな危機感をもたらした。住民説明会を経て、1日数便は従来のルートを走る形で折り合ったものの、減便によって日々の移動に支障が出るのは避けられない。

「実は、超高齢化が進む門馬地区では、これ以前にも地域の課題を話し合う場

で高齢者の移動手段が話題に上ったところがありました。車がないと不便なところで、例えば地区の催しでも乗せてくれる人がいないと集まれないと。その際に、『自分らが乗せて行けばなんとかなる。それくらいならできる』と言った方がいて、それにうなずく人も見かけたんです。それで、この思いを形にできないかと、有志の方々と互助型の移動支援について検討。門馬地区自治振興協議会の役員にも案内を出し、市の担当者を交えて19年4月に地区内で打ち合わせ会を開催しました。しかしそのときの話し合いは、結果として市への要望や合併後の不満を伝える場となり、とても移動支援の話を持ち出す雰囲気ではなく、むなしく閉会しました」と話すのは、送迎チームの立ち上げを支援した宮古市社会福祉協議会川井センター所属の第2層SC・引屋ひきや敷千春さん。

当時の地区内の空気は、「地域の課題を解決するのは行政の仕事」というものだったという。

SCと行政が二人三脚で活動創出をバックアップ

引屋敷さんはそれでも、「この地区には困っている高齢者がいるのだから」と、キーパーソンとなる有志と情報共有しながら、地区の会合などでもさまざまな発信を続けて機が熟すのを待った。

そして、急行バスの大幅減便。地区内が騒然とする中で、引屋敷さんは住民の声を聞いてまわり、「何とかしないと、地区内で暮らせなくなる高齢者が出てくる」「行政頼みではなく、自分たちでできることを考えよう」といった意見を踏まえ、危機感を共有する住民たちに、活動創出に向けて話し合いの場を持つことを再提案。

「集まった有志との話し合いは、21年9月から翌年3月まで計11回に及びました。住民の皆さんの不安や疑問に応えるため、一緒に制度を勉強したり、こんなやり方もあると提案したり。納得がいくまで、とことん話し合いました」

宮古市役所で当時、介護保険課に所属し、生活支援体制整備事業の担当だった安原智子さんも、毎回話し合いに出席して後方支援にあたった。

「制度について不明な点は、県のアドバイザー派遣制度を活用しました。移動支援の取り組みは全国にもいろいろな事例があるので、各方面から助言や情報提供をいただき、それを私のほうで確認・整理して提示。何をどう取り入れるかは、住民自身に決めてもらうというやり方で進めていきました」

当財団も有償ボランティアに関する情報提供などで協力したが、「会則

案を作成する際にも大いに参考になりました」と安原さん。

また、地区内で安定して送迎チームの活動を続けるには、自治振興協議会の同意が不可欠。同協議会の事業として位置付けてもらえないかと考え、理事会にも出向いて活動の趣旨などを説明した。しかし、当初はなかなか受け入れてもらうことはできなかった。

「地域の理解が得られているわけではないし、みんながそれに賛同しているわけでもない。何より、万が一事故が発生したときは誰がどのように責任を取るのか。その責任の所在を曖昧にして進めることはできない、というのがその理由でした。ただ、協議会の会長は地域のトップとしての見解とは別に、個人的には移動支援に賛同する部分もあると、送迎チームの一員になってくれ、まずは地区内のイベントで試行的に送迎をやってみて、課題を洗い出し

ながら実績を積み重ねることを認めてもらいました」（引屋敷さん）

お試し試行で手応え 送迎チームが正式に発足

21年10月、門馬地区の文化祭が開催されるのに合わせ、予約制の送迎をお試しで実施。

当日は20人ほどが集まり、さまざまに催し物に加えて「1日カフェ」として軽食も提供されるなど、参加者はコロナ禍の久しぶりの再開を喜び



安原さん

引屋敷さん

去石さん



マイカーボランティアによる送迎

合い、交流を楽しんだ。
「門馬地区は東西17キロメートルと広く、会場となった門馬地域振興センターからの距離が遠い集落もあるため、『送迎がなければ参加できなかった』との声も多く聞かれ、やってよかったと手応えを感じました」というのは、送迎チームリーダーの去石徹さん（63歳）。

その後も、地区行事で試行を重ねながら、運用に向けての詳しい情報を固めていった。また、住民からの評判が良かったことから、自治振興

協議会も地域の構成団体の一つとして全面協力を約束。そして22年1月、

正式に「門馬地域送迎チーム」が立ち上がり、4月に

地区内の広報誌で周知して利用者を募集。7月から本格的に活動が始ま

った。

「活動を開始するにあたって、一番問題になったのは保

険のことでした。チームのみんなから聞いた意見としては、自分の車のことはいい。ガソリン代も無償でもいい。

ただ、乗せた人への保険だけはきっちりしてほしいと」（去石さん）

そこで、活動者、利用者相互の安心・安全のために市社協の送迎サービス



門馬地区の文化祭が開催された門馬地域振興センター

「1日カフェ」の様子。21年10月の文化祭にて



補償に加入。保険料は、赤い羽根共同募金の助成金を活用。送迎範囲は門馬地区内とし、利用者宅とバス停間の送迎や地域行事の送迎のみとし、公共交通と重ならない部分をカバーするなど

毎月の定例会で
課題を話し合う



のルールを決めた。

現在、送迎チームは男女各4名の計8名。利用者の登録数は33

名。要介護認定の有無は要件とせず、地区内の住民であれば誰でも利用可能。市役所の出先である門馬出張所の協力を得て、平日は出張所が予約を

取りまとめ、送迎マッチングはLINEグループで調整。土日の予約は送迎チ

ームで対応。冬の雪道の運転は自信がないというところで、送迎チームの女性の中には利用者登録をしている人もいて、正に「困ったときはお互いさま」の活動を実践しながら、日々の移動を支えている。

「22年度は試行期間として無償送迎を実施。今年度は利用者からガソリン代の実費だけをいただき、活動費としてプール。実績を重ねながら、毎月の定例会では今後の運用に向けての勉強会も重ねています」（去右さん）

本気で取り組めば事は成す 継続のために有償を目指す

地区での送迎が定着することで、門馬地域振興センターにて月1回、「こここ茶茶」と名付けた集いの場も開催できるようになり、住民同士の交流が活性化。最寄りの黒沢バス停までの送迎で、盛岡や宮古への通院や買い物

もラクになる安心感など、プラスの効果がたくさん出ているそうだ。

「もともとこの地区では、道を歩いている人をそこまで、ちょい乗せ」する文化がありました。それを発展させたのが送迎チームです。やっていることは簡単で、こんなに喜ばれてもいるのに、いざみんなが頼みやすい仕組みにしようと思ったら、道路運送法のことや、事故が起きたらどうしようなどと、難しい話になってしまふ。でも、どんなときでも話し合いが途絶えないように続けてきたことが、前に進む原動力になったと感じています。まだまだニーズは増えると思うし、この活動を長く続けていくためにも、何としても有償ボランティアによる移動支援を始めたいと、みんなで知恵を絞っているところですよ」と、これまでの振り返りをする引屋敷さん。

安原さんは、「あくまでも住民が主



「にこにこ茶会」で行われた夏祭りでは、世代間交流も

体。その思いを引き出すのがSCの仕事ですが、移動支援は運輸支局への登録が必要か不要か、制度はどうか、運営資金の工面など、SCだけで進めるには壁が高い。だから、SCとの情報共有に努め、困難な部分を支えるのが行政の役割だと考えて取り組んできま

ました」と言い、引屋敷さんは「行き詰まったときに相談できる相手がいるのは心強かった。市の公共交通推進課など、要所所で必要なところとつないでもらうことで、いろんな人とつながれて支援を受けることができたのもありがたかったです」と振り返る。

そして去石さんは、「最近、障がい者施設に通っている近くの20歳の子を黒沢バス停から自宅まで送迎しました。行きは両親がバス停まで送ってくれるけど、帰りは両親もまだ仕事をしている時間帯なので送迎チームをお願いしたいとのこと、高齢者だけでなく、こんなニーズもあるんだなど。みんなに当てにされているから頑張れるし、しっかり基盤をつくって活動を次の世代につなげていけるようにしたい」と笑顔で話してくれた。

宮古市では他地区でも移動支援は

課題となっていて、この好事例をエッセンスとして取り入れることが期待される。本気で取り組めば事は成す。移動困難者を抱える各地でも、ぜひ参考にしていただきたい。

門馬地域送迎チーム

「困ったときはお互いさま」の精神に基づき、門馬地区の暮らしの足として、移動困難な高齢者等の支援を行うボランティアグループ。利用は登録制で、現状は予約に応じてチーム員が自家用車で送迎し、利用者はガソリン代実費を支払っている。送迎範囲は地区内のみで、利用者宅とバス停間の送迎にも対応。来年度より有償ボランティアによる移動支援を目指している。

- 連絡先／〒028-2302 岩手県宮古市川井第2地割165
宮古市社会福祉協議会川井センター
電話 0193-76-2310 (担当／引屋敷さん)



誰もが誰かの役に立って 地域みんながハッピーに

憩の家 みち（静岡県牧之原市）

「福祉とは、専門性より人間性」。そう信じて地域福祉の道を突き進む、異色の「元ヤンキー家長」と、通ってくる利用者の持てる力を引き出して、子どもから高齢者までみんながハッピーになろうと取り組む「憩の家 みち」を取材しました。

（取材・文／編集部）



「憩の家 みち」の外観

「理想の福祉」って何だ？
それをここで追求したい

中学時代からつぶばることを覚え、悪いこともやってきた。19歳のとき、

事故で大けがを負うも生活を改めることはなく、25歳までフリーター。親のスネをかじりまくっていたという石津道弘さん（51歳）。しかしそんなとき、

母親にガンが見つかった。愛情をかけて育ててくれた両親、そして、ふと思出したのが「あなたは優しいから、福祉の仕事に向いてるよ」という母親の言葉だったという。

東京から知らない土地に行つてゼロからスタートしようと、採用してくれた静岡県浜松市のデイサービスで運転手の職に就いたのが、石津さんの福

祉道^①の始まりだ。その後、通信教育で福祉系大学にも進学。福祉系の資格も次々と取得し、仕事に打ち込んだ。しかし――。

「介護保険の画一的なサービスや、専門性が最優先されることなどに、『何か違う』という思いがあつて、理想の福祉って何なのか、自分なりに追求しようと思いました」（石津さん）



みちには子どもたちも遊びに来る

2005年、石津さんが掲げた「介護保険に頼らずに困っている人を助けたい」という理念に賛同して集まった介護士、看護師、ケアマネジャー、調理員等の仲間15人と、難病の人の外出支援を中心に活動を開始。だが現実は一層厳しく、ボランティアだけでは立ち行かない。自分なりの福祉の道を行くために06年、介護保険のデイサービス事業とボランティア活動の2本立てで

「憩の家 みち」を設立した。スタッフ12名と一緒に「家長」として活動を開始し、借金をして牧之原市に現在の拠点となっている中古住宅も購入して、隣に住んでいたその家の元住人の最期も看取ったという。もちろん、お金はもらわなかった。

☆ その人の持つ力が 誰かの役に立つように

みちのデイサービスでは、レクリエーションやリハビリだけでなく、認知症のある利用者に積極的に地域へ出てボランティア活動に参加してもらおう。

「ここは普通の一軒家で狭いですが、活動や活躍の場を外に求めるようになったんです。認知症だからと見守るばかりでなく、もっと地域で役に立つ経験をしてもらいたい。同時に、地域の方々に何か貢献できないかと考え、近くの市立勝間田小学校に『児童の下校見守りをしたい』と申し出たところ、

快諾してくれました。行政も協力的で見守り隊の服を貸与してくれました」と石津さん。「福祉」を実践したいという熱い思いが地域に伝わっていったのだろう。

中には「認知症なのに見守りなんてできるの?」「子どもたちより危ないんじゃないか」などという声も聞かれたそう。しかし認知症の高齢者も、子どもを見ると不思議としっかりするし、「横断歩道は危ない」という理解はあるのだそう。もちろん必ずスタッフが付き添って、安全を確保した上で活動している。

「子どもたちのために停まってくれた車に、利用者さんが『ありがとうございます』と言って頭を下げるんです。誰もそんなことは教えていません。それは、その人の生まれ持った資質ですよ。僕たちは認知症になってもその人がもともと持っている力を仲介して、誰かの役に立つように橋渡しをするだ

「利用者がさ
でいいんです」さらに、「利用者さ
んが元気だった頃を知っているご家族
は、『こんなにほげちゃって、どうし
たらいいの？』という思いを抱いてい
ることが多いんです。ですから、認知
症になっても地域の役に立っていると
いうことを、ご家族には積極的に伝え
ています」

「俺がやらにゃあ」 児童の下校見守り

その下校見守りに同行させてもらっ
た。小学校のすぐそばの交差点だが、
信号機がない。大きな通車ではないが、
車が意外とスピードを出して往来して
いた。

スタッフとして見守りに加わってい
る藤田尚子さんは、「ここは田舎で車
がないと生活できないから、年配の方
の運転が多いんです。そうすると、一
時停止に気づかず、脇道から出てきて
しまうなど危険を感じることもありま



児童の下校見守りの様子

す。旗を持って通学路に立っているだ
けでも車が減速してくれるので、子ど
もたちの安全につながっていると思っ
ています。見守りが終わってみんなで見
ちに帰ると、ひと仕事終えた皆さんが清
々しい表情をされていて、自信になっ
ているんだなと感じます」と、やはり
清々しい表情で語ってくれた。

活動している利用者は、「家長さん
から勧められて始めたけど、やってみ
たら小さな子どもたちがかわいくてね。
俺の孫はもう20歳を超えているから。
『この子たちのために、俺がやらにゃ
あな』という気持ちで湧いてくるから
頭がしゃっきりしますよ」と、誇らし
げに話してくれた。

子どもも高齢者も 地域みんなでハッピー！

勝間田小

学校の小林

宏美教頭は、

「下校見守

りは本当に

ありがたい

です。今は、どのご家庭も保護者が忙

しくて、以前ほど見守りが行き届きま

せんから」と話す。

同小学校は、地域の人たちと共に学
校づくりを推進する「コミュニティス



勝間田小学校の
小林教頭

石津さん（中央）と子どもたち



総合的な学習の時間で福祉について教える
ふくしマン（石津さん）

ンテイア
活動を行
っている。
石津さん
がウルト
ラマンの
格好をし
て保育園
にお菓子
を配りに
行く活動
も10年を

超え、今ではすっかり地域に定着した。
「デイサービスの利益を地域に還元す
る」という考えで、事前にお菓子を買い
て袋に詰める作業は、みちのみんな
で行う。「子どもたちが喜ぶだろう
な」と思いながら、毎回張り切って取
り組んでいるそうだ。
「僕は高齢者介護の分野でやってきま
したが、未来の日本をつくるのは子ど
もたちですし、親も必ず年を取りませ
だからこそ子どもたちに『自分だけじ
やなくて、おじいちゃん、おばあちゃ
んもハッピーに暮らすんだ』という地
域福祉の考え方を伝えたい。それが結
局、みちに通う皆さんの幸せにもつな
がると信じています」と石津さん。
純粋に地域を思う姿勢が評価され、
みちは18年、牧之原市社会福祉功労事
業所として、19年には静岡県の優良介
護事業所として表彰された。
自分の近所にもこんな家があったら
安心だろうな…。みちはそんな場所だ。

クール」で、石津さんは4年前に設置
された学校運営委員会のメンバーだ。
6年前からは、4年生の総合的な学習
の時間で「福祉教育」という単元を受
け持っている。授業では『ふくしマン』
というヒーローのコスプレをして、
『ふだんのくらしのしあわせ』と
いうスローガンを掲げ、福祉の基本を
子どもたちに教えている。また昨年度
は、特別支援学級の児童が授業で学習

した内容をまとめ、みちに来て利用者
に発表会を開催。
「おじいちゃん、おばあちゃんが『す
ごい』『立派だ！』と褒めてくださ
ったので、子どもたちの大きな自信に
なりました。みちの皆さんも『子ども
たちから元気をもらってるよ』と言っ
てくださって、とても良い関係です」
（小林教頭）
ほかに、みちではさまざまなボラ

近くに住んでいないことで、「子育て」が「孤育て」になっていると感じていました」と話すのは「なべみさん」こと、たまふら代表の佐藤恵さんめぐみ自身も3歳の男の子の母親だ。

活動開始のきっかけは、コロナ禍で我が子の遊び場をなくした佐藤さんが自分の思いを中学時代からの友人、赤尾郁里さんかほりと久保緩奈さんかんなに話したことだった。それを聞いた2人は、力になりたいと思ったという。団体名はたまにふらつと立ち寄ってほしい、との思いと、立ち上げメンバー3人がよく行っていた温泉「たまゆらの里」を合わせて名付けられたそう。

「ママたちが適度に力を抜いて、『明日もぼちぼち頑張るか〜!』と思える空間であることを大切にしています」と佐藤さん。

佐藤さんの笑顔は、周りを優しく包み込む雰囲気をつくり出す。相手と真っ直ぐに向き合い理解しようとする姿勢に、周囲にいる人たちは皆、「佐藤さんがやることなら手伝いたい」と思うそうだ。

●子どもがつながり、ママもつながる

あんよルームは、みんなが存分に遊べるようコミュニケーションセンターの広い部屋を使用。企画は参加しているみんな考えている。取材当日は、父の日の特別企画で、フォト付きメッセージカード作りを行っていた。「私だけのカードを作りましょう!」ということで、子どもの手のひらにインクを付けて手形を押ししたり、すぐに現像できるカメラを使って写真を撮ったり、ペンで自由に描いたり、キラキラで子どもの目を引くシールを用意するなど、子育て中のママたちだからこそ思いつく楽しい工夫がされていた。

時間が来ると、父の日の特別企画をやりながら



庭での外遊び。パパも子どもと一緒に遊びに熱中



父の日のメッセージカード作りの様子

無料の遊び場に早変わり。ボールプールやミニカー、音の鳴るおもちゃなど、おもちゃがいっぱいに置かれた中、子どもたちは自由に動きまわって遊んでいた。部屋とつながっている庭にも遊びスペースを用意し、シャボン玉を追いかける子どもたちの姿が見られた。最初はママにくっついていたり、初めて会った子とおもちゃを通してやり取りができるようになっていた。そして、子ども同士と一緒に遊ぶようになるママ同士が話をするようになり、そこからつながりができていく。

● みんなが担い手に

たまふらの運営を支えているのが、「音楽隊」「まちづくり隊」「おにぎり隊」の活動だ。

音楽隊は、あんよルームでは欠かせない企画の一つ。赤尾さんと正木敬代さんがピアノでの生演奏を担当している。

「音楽は、子どもたちの成長に良いだけでなく、パパやママのリフレッシュにもなると思ってます」と佐藤さん。

小さな子どもたちが好きな曲から大人が知っているポップス、クラシックまで、2人が幅広いジャンルの曲をピアノで演奏すると、遊んでいた手を止めてピアノの音に聴き入る子、思わずハイハイをしてピアノのそばに行く子、ノリノリで身体を揺らす子もいて楽しそうだ。そして何より、大人に人気の企画だ。

まちづく

り隊は、あんよルームに来るママたちの話を集約し、行政への政策提言を行っている。



左下から時計回りに、音楽遊びの様子、音楽隊、おにぎり隊。右下は、前列左から久保さん、佐藤さん、赤尾さん。後列は佐藤さんたちの中学校の同級生の皆さん

おにぎり隊は、参加するママたちが少しでも楽ができるように、コミュニティセンターの調理室が空いているときにおにぎりを作るボランティアのママたち。3人で100個以上のおにぎりをにぎるといふ。具材はサケやふりかけなど、大人だけでなく子どもも好きなものを選び、みんな楽しく食べられるようにしている。

スタツフの皆さんは昔からの知り合いのように「あうんの呼吸」で活動しているが、聞けば、たまふらをきっかけに出会った人たちとのこと。とても生き生きと活動していらっしやいますね、と聞くと、「やっていて楽しいから」「無理のない範囲でやっています」と話してくれた。やはりボランティアスタツフも、「無理なくのびのび」が大事なようだ。おにぎり隊員のママと一緒に来ているパパたちも、子どもと一緒に準備や後片付けで大活躍だった。

さらに、大学のボランティアサークルに入ったことがきっかけでたまふらとつながった大学生や、一般住民のボランティアも、たまふらの活動をサ

ポートしている。初めて参加した人も、最初は緊張している様子だったが、佐藤さんや他のスタツフの雰囲気に取り込まれ、時間が経つにつれてすっかり笑顔で溶け込んでいる様子が印象的だった。

● コロナ禍で絶たれたつながりを取り戻す

参加していたママたちからは、コロナ禍で「人に話しかけていいのかわからない」「子ども同士どの程度ふれあっているのかわからない」という声が聞かれた。そんな状況が続いた中、あんよルームが子どもたちが安心してふれあえる場になった。

佐藤さんが当事者として言っていた通り、現代の子育ては孤立しがちで、周囲との関わり方も難しくなっている。そこへ、ここ数年コロナ禍が追い打ちをかけ、母親も小さな子どもたちも他者との距離感が分からなくなってしまうのではないだろうか。そんな今だからこそ、「誰でもウェルカム！」でオープンなこの活動に救われ、明るさを取り戻す親子が増えていくことを願う。

応援ありがとうございます！

「地域助け合い基金」助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、さまざまな世代・人々が参加する地域共生社会への取り組みや、コロナ禍での困りと解決のための活動を支援している「地域助け合い基金」。今月号は、子育てママや妊娠中の女性を対象とした居場所、通院サポート、町内会の生活支援活動を紹介します。

なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに随時アップしていますので、思いが詰まった多彩な活動をぜひご覧ください。

埼玉県所沢市

助産師らが 子育てママや妊娠中の女性の居場所づくり

ごきんじよさん会

助成金額 15万円

ごきんじよさん会は、助産師3名と思春期保健相談士1名がタッグを組み、乳幼児の子育て中の母親や妊娠中の女性が、悩みの有無にかかわらず気軽に立ち寄れる居場所つ

くりを目指して、2022年に立ち上げました。団体名には、「ご近所さん」「助産」「産地（地域）」に根付いた活動を展開したいという願いが込められているそうです。

ごきんじよさん会主催のおしゃべりを楽しむ子育てサロンは、所沢市近辺の母親と妊娠中の女性を対象に、22年5月からほぼ月1回のペースで開催。参加費500円で、母親の目が届くところで運営スタッフに子どもの世話を任せ、みんなでおいしいご飯を食べながら子育ての悩みを共有したり情報交換をしています。また、助産師であるスタッフが希望者に足浴やマッサージを施したり、トイレトレーニング



サロンでの子育て経験者とのおしゃべりタイム



通院サポート活動の様子

できる活動を検討しました。
本基金の助成金は、自力での通院に不安がある高齢者等への移送サービスを行うために、ボランティアを養成するための安全運転講習費用、車両マグネット購入、ボランティア保

また、各町内会で見守り・ささえあい活動を実施してもらうために、協議体エリアの町内会長と民生委員（約60名）を対象に「合同研修会」を開催。すでに活動を実施している町内会の活動報告をしてもらい、各町内会で

場の参加者や近隣の高齢者のためにさまざま活動に取り組んできました。

水丘地区ささえあい協議会は、2022年に設立。地域の集いの場にシルバー人材センターで作った野菜を持ってきてもらったり、移動販売車を誘致したりするなどして、

助成金額 15万円

水丘地区ささえあい協議会

通院サポートを開始 見守りや地域の現状把握につなげる

兵庫県加古川市

グ等の個別相談へのアドバイスも行っています。回を重ねるごとに、参加者同士が子育て以外の話ができるほど打ち解けた雰囲気になっていくということです。
本基金の助成金は、サロン開催時のお弁当や消耗品購入、スタンプ交通費、サロンの中での講習会の講師謝金等に活用されました。

ごきんじょさん会では設立当初より、将来的には多世代交流ができるような通いの場づくりを目指しており、今後の展開が楽しみです。

除料等に活用していただきました。

昨年4月には、「通院サポートひおCar」を立ち上げ、週1回の運行を開始しましたが、利用希望が多く、8月からは週2回運行し、利用者から感謝の声が届いているとのこと。移動の課題を解決するだけでなく、利用者とボランティアという住民同士の交流機会になり、それが見守りや地域の現状把握にもつながっているといます。ささえあい協議会は地域の多様な企業・団体がメンバーとなっているため、今後もさまざまな角度から検討を進め、一人でも多くの地域住民の支えとなるように展開していきたい、と報告を下さいました。

長崎県大村市

**無理なく楽しく生活支援活動
すべての人が支援し、支援される地域へ**

鬼橋町町内会

助成金額 14万4000円

鬼橋町町内会では、「よか町づくり協議会 おにぼう」

の会議で避難行動要支援者など高齢者の話題が中心になることが多く、昨年からは、自然と高齢者の生活上の困りごと

の話題が上がるようになりました。そこで、75歳以上の一人暮らし高齢者と高齢者世帯にアンケートを実施、11%の人が今すぐにも支援が欲しいという結果が出ました。また、今は必要ないが今後は支援があるなら受けたいという人も53%いたそうです。

このようなことから、「おにぼう」と並行して「おにぶく」の愛称で助け合い活動の支援者を募集し、活動していくことになりました。

本基金の助成金は、「おにぶく」ロゴマーク入りのビブス、支援作業のための用具購入に充てていただきました。

スタートの段になると世話人や運営委員の不安感が増したそうですが、そんなときは皆で集まって話し合いや活動のリハーサルも行ったとのこと。しかし、活動を始めてみると依頼者が大変喜んで、支援者に「楽しかった！またやってほしいよ」という気持ち素直に生まれて、支



ロゴマーク入りビブスを着用した「おにぶく」メンバーの皆さん

「地域助け合い基金」 状況のご報告

援者が無理なく楽しく支援を続けられることは最大の宝となつていくそうです。現在の活動は草取りが多く、支援者は32名とのこと。

皆様のご支援により全国各地の助け合いを助成している「地域助け合い基金」。
7月15日までの状況をご報告いたします。

7月15日 当財団ホームページ開示時点

◎寄付受付額

219件

3190万6836円

このほかに当財団より1億4000万円を供出

◎助成実行額

977件

1億5350万4034円

地域助け合い基金は、地域共生社会の実現を目指し、助け合い活動のスタート・継続を支援しています。引き続き皆様のご支援・ご寄付をよろしくお願ひ申し上げます。
(事務局長・内田)

「これまでの通念だった『高齢者が支援される人』ではなく、『すべての人が支援し、支援される』地域共生こそが私たちの理想」と意気込みを寄せてくださいました。

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。



クレジットカード
決済ページ



財団ホームページ内
基金関連ページ

●基金に関する情報、
およびクレジットカード決済は、
QRコードもご利用ください！

基金に関するご意見・お問い合わせ

<地域助け合い基金担当>

電話：(03) 5470-7751 FAX：(03) 5470-7755

メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

老いの暮らしを創る

あと3年

福祉ジャーナリスト 村田 幸子

私が車の運転免許を取ったのは、大学卒業間近の22歳の時でした。我が家に車が来たのはそれから数年後。以来運転し続けて60年近くになります。無事故・無違反と胸を張って言える状態ではありませんが、それでも運転年数の割にはそこそこ無事にカーライフを楽しんできました。

車は、暮らしに広がりとしみをもたらしてくれました。加えて4代初めに股関節の手術をしてからは、私にとっては暮らしに欠かせない存在にもなりました。日用品の買い物や病院通いなど、暑くても寒くてもドアツードアで動けることは、移動に不自由を感じる者にとっては何より有り難いことです。しか

し昨今、「えーッ、まだ運転しているの」「もう、いい加減にやめなさいよ」と、周りの声の喧しいこと。確かに高齢者が起こす事故は重大な事故につながり、多くの悲劇を生み出しています。免許返納を求める機運も強く、今年の免許更新時には私も返納しようかどうかと相当迷いました。社会的プレッシャーの他にもう一つ、私が迷った理由があります。

それは75歳以上の高齢者に義務づけられている認知機能検査です。認知機能検査の一つに、16種類の絵を限られた時間内で記憶して、そのあと2問ほど他の問題に答え、改めて「さあ、さきほどの絵を思い出して書いてください」という試験があるのです。16種類の絵はA B C Dと4パターンあるので、絵は全部で





64種類。当日の試験で、どのパターンが出るかはわかりません。幸いなことに認知機能検査の試験問題は、警察庁のホームページで公開されています。

私が免許更新すると伝えた途端、すでに試験を受けていた従妹や友人から、試験問題のコピーがどっさり送られてきました。いい加減な覚え方だとどのパターンが出たかわからなくなるから、しっかりと覚えなさいよ。書いて書いて書きまくって覚えるのよなど、叱咤激励の数々。若い頃から記憶力が悪く、友人たちと旅の思い出話をしていても、「へえ、そうだったの」とビックリする私に、「貴女も行ったじゃない」とあきれ顔に言われることなどは日常茶飯で、私にとっては年齢よりも、この記憶力を試される試験が最大の難関でした。さあ、それからは様々なお誘いもすべて断って、歩きながら、また電車やバスの中で、クリニックの待合室で、私はコピー片

手にムニヤムニヤと64種類の絵を必死で暗記し続けました。

合格！

身体機能検査も実技実習も、言うことなし。ルンルン気分というのは、こういうことを言うのでしょうか。

でも何故、試験問題が公開されているのか不思議でなりません。試験が終わってから警察庁に問い合わせました。「認知症だと覚えることができませんので公開してもいいのです。医師の行う認知症の診断に代わるものではありませんので」とのこと。

免許更新に続いて7月は車検でした。これを機に車のナンバーも今の居住地に変えることにしました。整備されて戻ってきた車は多摩ナンバーです。住まいも車も、多摩の人にあと3年。時に福祉機器のように私を助けてくれる車との生活を、つつがなく終えたいと思います。



(むらた さちこ) 立教大学英米文学科卒業後、NHKにアナウンサーとして入局。報道番組のリポーターや社会性のある硬派の番組を中心に担当。1990年、解説委員に就任。NHKスペシャル「あなたが寝たきりになった時」、NHKモーニングワイド「高齢化社会」のキャスター他、多くの番組を担当。2004年、解説委員を退職後も高齢者問題の第一人者として活躍中。

ジェンダーの
視点から
人生
100年時代を
生き抜く知恵 12

戦争の記憶

お茶の水女子大学名誉教授 袖井 孝子



(そでい たかこ)

お茶の水女子大学名誉教授、東京家政学院大学客員教授、一般社団法人シニア社会学会会長、一般社団法人コミュニケーションネットワーク協会会長、NPO法人高齢社会をよくする女性の会副理事長。専門は老年学、家族社会学、女性学。主な著書に『変わる家族 変わらない絆』『高齢者は社会的弱者なのか』（以上ミネルヴァ書房）、『女の活路 男の末路』（中央法規出版）、など多数。

第二次世界大戦の敗戦から78年。人口の大半が戦後生まれという今日、戦争の記憶は薄れつつある。だが今や、かつてないほど戦争の足音が近づいている。二度と戦争を起こさないことを誓った憲法9条があるにもかかわらず、最近では憲法を改正することなく、その解釈を変更するだけで、日本は戦争のできる国へと変貌を遂げつつある。最近では、与党協議によって「防衛装備移転三原則」の要件が緩和され、殺傷能力のある武器が輸出されるおそれが出てきた。「台湾有事」を口

実に、沖縄の島々には自衛隊基地が建設され、ミサイルの配置が進んでいる。次の戦争への準備が着々と進んでいるようで、不気味だ。日本人の多くは、戦争を忘れつつあるが、日本軍に占領されたアジアの国々では、その痛みと屈辱を忘れてはいない。アメリカに留学していた1960年代半ば、私はフィリピン女性とアパートをシェアしたことがある。彼女は、マニラにある高等学校の英語教師で、英語教育の修士号を取得するために、4人の

子どもを残して留学してきていた。瞳の大きな優しい女性だった。

ある日、雑談をしている最中に、突然彼女は、「見よ、東海の空明けて」と歌い出した。最後まで歌い終わると、啞然としている私を前にして、大きな声で、「イチ、ニ、サン、シ」と号令をかけながらラジオ体操を始めた。子どもの頃に教え込まれた日本語や日本文化を伝える教育がしっかりと記憶されているのである。

今、ロシア軍がウクライナの子どもたちを拉致して、ロシア語やロシア文化を教え込み、ロシアへの忠誠心を育もうとしていることに対して非難の声があがっている。しかし、かつての日本軍は、アジアの子どもたちに日本語や日本文化を教えるだけでなく、皇居遥拝までさせている。

去る5月25日、私は女たちの戦争と平和資料館で、イ・ヒジャさんの講演を聞いた。長年にわたる彼女は、1944年2月15日に朝鮮半島から日本軍に強制動員された父親の行方を捜し続けてき

た。71年に韓国政府が日本政府から受け取った戦死者名簿で、父親が45年6月11日に中国江西省の病院で戦傷死したことをつきとめたのは92年だった。さらに93年には、日本政府が韓国政府に渡した軍人・軍属関係名簿で、父親が靖国神社に合祀されていることを知る。

「父を連れて行って死なせた日本が、何の権利があつて靖国神社に祀るのか」イさんは悔しさに身震いがしたという。靖国神社に問い合わせたところ、父親が合祀されたのは戦後のこと。厚生省（当時）から名簿が渡され一括して合祀されたのであり、いったん英霊として祀られたものを取り消すことはできないと聞かされた。合祀の取り下げを求めて、イさんは日本政府と靖国神社を訴えているが、今のところ敗訴が続いている。

多くの日本人にとって、第二次世界大戦は終わったことかもしれない。だが日本軍に占領されたアジアの人びとにとって、今なお戦争は続いていることを私たちは決して忘れてはならない。

未来を強くする 子育てプロジェクト

募集のご案内

■ 子育て支援活動の表彰

より良い子育て環境づくりに取り組む
団体や個人を表彰します。

◇ **内閣府特命担当大臣（こども政策）賞**
表彰状（スミセイ未来大賞から1組）

◇ **文部科学大臣賞**
表彰状（スミセイ未来大賞から1組）

◇ **スミセイ未来大賞**
表彰盾、副賞100万円（2組程度）

◇ **スミセイ未来賞** 表彰盾、副賞50万円（10組程度）

■ 女性研究者への支援

子育てと人文・社会科学分野の研究活動の両立に努力されている
女性研究者を支援します。

◇ **スミセイ女性研究者奨励賞** 助成金最大200万円（10名程度）

募集締め切り 2023年9月8日（金）必着

応募方法 同プロジェクトのウェブサイトにて募集要項を確認のうえ、応募用紙をダウンロード・記入し、必要資料と一緒に送付

選考 事務局による選考の後、選考委員による選考会を経て受賞者を決定

発表 受賞者には2024年1月末までに直接連絡（表彰式等あり）

宛先
お問い合わせ

「未来を強くする子育てプロジェクト」事務局
〒102-0072 東京都千代田区飯田橋2-14-7 光ビル
電話：03-3265-2283（平日10:00～17:30）

【ウェブサイト】 https://www.sumitomolife.co.jp/about/csr/community/mirai_child/



新しい ふれあい社会づくりに 向けて

ふれあい

いきがい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。

さらに、全国自治体が地域支援事業で取り組んでいる
住民主体の助け合いの地域づくりも強力に支援しています。

どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

- **ご支援ありがとうございます。**

さわやかパートナー（賛助会員）・
ご寄付者の皆様のご紹介

- **NEWS & にゅーす**

- **さわやか活動日記**（抄）



ご支援ありがとうございます。

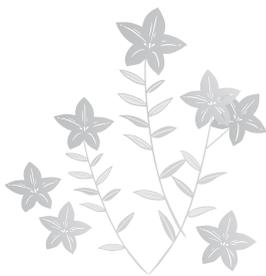
さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

(敬称略) (2023年6月1日～6月30日財団受付分) ※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合がありますご了承ください。

さわやかパートナー個人 (52件)

(都道府県別50音順)

北海道	川崎 京子	吉田 由依	広島県	黒木 詔子	福岡県
末澤 勝典	埼玉 眞玉	富山県	林田 規子	芳賀 晟寿	
岩手県	青木 武雄	田中 寿和	深田 普佐次	長崎県	
小野寺 隆一	内村 実佳	滋賀県	徳島県	瀬口 卓也	
宮城県	永末 厚二	梅沢 久子	坂東 恵子	熊本県	
河村 憲二郎	千葉県	京都府	香川県	木下 眞理子	
秋田県	岩本 かす美	北野 愛子	原田 典子	大分県	
三政 貴秀	鈴木 文雄	嶋田 雅文	清家 修		
茨城県	羽島 豊	松本 一芳			
関 正樹	森谷 公俊	松本 匡治			
丹 協子	東京都	大阪府			
丹 文子	宇野澤 虎雄	池内 節子			
平沢 光子	鹿野 哲	兵庫県			
栃木県	蒲田 尚史	高橋 威年			
		奈良県			
		久保田 秀樹			
		平田 京子			



さわやかパートナー法人 (8件)

(50音順)

株式会社シーエスエス	株式会社八洋
NPO法人たすけあいあさひ	山崎製パン株式会社
NPO法人たすけあい大田はせさんず	株式会社八洋
NPO法人たすけあいほつとライフ小川	株式会社八洋
土屋建設株式会社	株式会社八洋
日本郵政グループ労働組合	株式会社八洋
株式会社八洋	株式会社八洋
株式会社八洋	株式会社八洋

一般ご寄付 (3件)

(50音順)

株式会社八洋 (50万円)
ボランティア・ペンター協会 (42万9775円)
米田 俊子 (2万円)

NEWS & にゅーす



令和4年度（2022年度）

決算が承認されました

2022年度決算

期末指定正味財産

23億1904万9348円

期末一般正味財産

8億4207万9072円

6月7日に理事会、26日に評議員会を東京都千代田区の新丸ビルコンファレンススクエアにて開催しました。主な議案は、令和4年度事業報告並びに決算の承認です。昨年同様、一部の監事はウェブ会議システムを利用して出席しました。

理事会、評議員会共に、まず清水肇子理事長が当財団の活動全般について説明しました。最初に、当財団の創設者であり、創設以来住民主体の助け合いを進めるといふ大きな道筋を社会に向けても示してきた堀田前会長が勇退したことが報告され、堀田前会長に「永世名誉パートナー」の称号を授与したとの説明がありました。また事業面では、3回連続で開催した「いきがい・助け合いサミット」が、9月に開催した「いきがい・助け合いサミット in 東京」をもって終了したこと。今後は全国の現場から情報を収集し、国

をはじめ行政、企業、学校等に、そして、一人一人の尊厳ある暮らしに向けてしっかりとメッセージを発信していく、という方向性が示されました。

ふれあい推進事業においては、コロナ禍が収束しない状況の中、また、地域支援事業開始から8年が経過して行政担当者や生活支援コーディネーターの異動も相次いだ中でも、主に都道府県を通じて生活支援コーディネーターや協議体を核とした住民主体による地域づくりを強力に行なったこと。さらに、「いきがい・助け合いサミット in 東京」では、「いきがい・助け合いサミット」の集大成として「住民・市民の主体的参加による地域共生社会の実現」というメッセージを発信できたこと。協働して地域づくりを進めているさわやかインストラクターの広域ブロックから都道府県ブロックへの移行が進んでいること等が報告されました。

みんなで、誰もが安心して暮らせる 地域共生社会をつくりましょう



公益財団法人
さわやか福祉財団

ふれあい推進事業に加えて、当財団の公益目的事業である、社会参加推進事業、情報・調査事業についても、それぞれの主要な活動について報告がありました。特に社会参加推進事業では、勤労者の社会参加について新たなパンフレットを制作して提言を進めたことおよび「子ども・子育て市民委員会」の事務局として「安心して子どもを生み育てられる社会」の実現に向けた提言を行ったことが報告されました。

その後、事務局長の内田から決算の内容について詳細な説明を行いました。また、新たに頂戴した故小林八重子様、

故駒井雅子様、匿名の方からの遺贈によるご寄付の内容や、新たに1件の遺贈のお申し出があることを説明しました。当財団の理念と活動に共感していただき、大変貴重なご資産を遺贈という形で遺してくださいました皆様には、厚く御礼申し上げます。

理事会、評議員会共に、ご出席の皆さんから多くの貴重なご意見をいただき、活発な質疑応答の後、全会一致で原案通り承認されました。なお、当財団の理事を長く務めていただいた鈴木勝治氏が辞任され、後任として公益財団法人公益法人協会理事長の両宮孝子

役員就退任のお知らせ

【理事 退任】（6月23日付）

鈴木 勝治

公益財団法人公益法人協会

副理事長（当時）

【理事 就任】（6月26日付）

両宮 孝子

公益財団法人公益法人協会理事

氏が就任されました。
事業報告並びに決算報告は、本誌付録および当財団のホームページでもご覧いただけます。
（内田 信幸）

さわやか活動日記(抄)

SCII生活支援コーディネーター

地域支援事業の活動報告は、このページのほかに当財団ホームページにもアップしています。ぜひご覧ください。

column

新潟医療福祉大学と協働 助け合いの効果の見える化に向け、 「茶の間」で調査

■新潟県 ■担当 常務理事・共生社会推進リーダー 鶴山 芳子

新潟県内を中心に広がる「地域の茶の間」(創設者・河田珪子氏)は、同県の調査によると2500か所以上存在する。赤ちゃんから高齢者まで、障がいのあるにかかわらず誰もが参加でき、自由に過ごせる場であり、つながりが生まれ助け合う関係が広がっている。昨年10月、代表的な茶の

間である新潟市地域包括ケア推進モデルハウス「実家の茶の間・紫竹」(以下、「紫竹」)(代表・河田珪子氏。新潟市と協働)の8周年において、新潟医療福祉大学医療経営管理学部の石上和男教授が中心となって学生が聞き取り調査を行い、助け合いの効果を見える化したことについては、



当財団「さあ、やろう」v01・22で紹介した。心の動きを重視する助け合いの効果を数値化することはこれまで難しいとされてきたが、「紫竹」に由来前の状況と来てからの状況を聞き取り、グラフ化したことで見える化された。

今年度になり、4月に財団は、河田氏、石上教授と、

特に「つながりから生まれるいきがい」など心の変化に着目した調査を、県内のいくつかの「地域の茶の間」で実施し比較調査してはどうかと話し合った。そして財団として、助け合いの地域を広げる基礎となる居場所の調査を事業化し取り組むこととした。調査内容や生まれる効果だけでなく、調査手法も含めて全国に発信していく時と捉え、新潟医療福祉大学と協働で取り組んでいく。また、県内の複数の「茶の間」を調査す



5月8日の第1回検討委員会の様子。「紫竹」にて

ること、県内外に発信することから、検討委員会を立ち上げ、議論しながら進めていく。

5月8日、第1回検討委員会を「紫竹」を会場とし

て行った。参加メンバーは、河田氏をはじめとする実践者、石上教授を筆頭とする調査分析専門家、理学療法士、作業療法士、新潟県庁、新潟日報など計14名。財団

が進行し、目的を共有して、調査対象の選定方法やスケジュール案、予算案などを基に議論した。その後、石上教授、同大学の高野晃輔助教、河田氏、財団で、アンケートの内容について打ち合わせを重ねた。何度も打

ち合わせを行うことになったのは、いきがいなど心の部分についての変化に助け合いの効果はどうしたら効果的に打ち出せるのかという、ほかではあまり見られない調査だからである。30年以上も助け合いの実践を続けてきた河田氏や、推進してきた財団の意見を石上教授らが受け止め、「マズローの欲求5段階説」をベースに項目を整理し、調査票を作成する、ということになった。

7月9日、オンラインで最終打ち合わせを実施し、アンケート調査票が最終決定された。調査項目は50を超え、同17日には、調査に関わる同大学の学生数などが「紫竹」での高齢者等と

のふれあい体験と、河田氏を講師とした勉強会を行うことになった。8月には聞き取り調査が始まる予定。

昨年10月の調査では、学生の熱心な聞き取りが高齢者らの気持ち予想以上に引き出す結果になったという。「まるで孫のような学生たちの熱心な様子に、高齢者も一生懸命に答えようとした。とても良い雰囲気だった」と河田氏。引き続き、そんな魅力も発信していきたい。



関係者が、助け合いを創出する地域基盤づくりを丁寧に進めた理由

■ 沖縄県北中城村 ■ 担当 共生社会推進リーダー 長瀬 純治

沖縄県北中城村で、住民主体の活動創出に向けた取り組みが動き出した。

現在、介護保険では介護認定を受けた人向けのサービスだけでなく、生活支援や介護予防につながる地域活動を生み出すことを狙いとして、「協議体」という仕組みづくりが制度の中で進められている。この仕組みは、特に、各自自治体において定める日常生活圏域を第2層と位置付け、圏域ごとに自治会や民生委員、老人会やボランティアグループなど、さまざまな立場の地域住民が集まり、それぞれの持つ地域情報を共有す

ることで、地域の今を知り合い、さらには必要な地域活動を創出するための意見を出し合うことが想定されている。北中城村は、村内2つの日常生活圏域のうち、まず1つ目の「第2層協議体」を今年3月9日に設置することができた。

行政が地域住民を集め「話し合いをさせる」仕組みと聞くと、それ自体は何も珍しいことではないように感じるかもしれないが、実はこの協議体の編成について、北中城村では1年近くの時間を費やしてきた。その理由は、協議体がこれまでの一般的な委員会のよ

うな「話し合いをさせる」組織とは異なり、構成員として参画する住民の自発性が求められるからだ。実際、この特徴を理解するために、関係者も協議体のあるべき姿について協議を何度も繰り返し返してきた。その結果、行政等関係者から、既存組織の役職者に対して事務的に（半強制的に）依頼するのではなく、まずは構成員としての役割を広く住民に説明し、関心を持つ人を対象に勉強会を開催し、その参加者から自分の意思で構成員として参画する人たちを集める方針を決めた。

北中城村は、介護保険業

務を沖縄県介護保険広域連合の組織の中で進めているが、この取り組みもモデル事業として広域連合のバックアップを受けて進めている。こうした環境が、今回の決断のように手間のかかる作業を進める現場の大きな力になっている。

その後、関係者がチームワークで地域をまわり、ヒアリングを行うと、住民からはさまざまな反応があったようだ。もちろん前向きな反応ばかりではない。むしろ、何か責任を負わされるのではないかという警戒心からか否定的な意見もあったが、関係者は一丸とな

って一つ一つ丁寧に説明を続けた。

そして、迎えた勉強会の当日。自分の意思による参加を促していたため、そのときまでどれだけの人数が集まるか分からなかったが、最終的に約30名の参加があった。当財団も制度の基本的な説明や、全国の事例紹介など情報提供で協力することになった。その際、説

各地・各事業の取り組みをご紹介します

地域食堂のモデル実施に向け 第1層協議体でアドバイス

東京都奥多摩町

【6月6日】奥多摩町で、第1層協議体を対象とした

講演会が行われ、当財団が講師として協力した。参加

明に合わせて協議体の活動についてイメージを深めるため、簡易的なワークを実施すると、参加者は積極的に意見を出し合っていた。

立場が異なれば、それぞれの知り得る地域情報も異なり、情報交換をすることが意外にも自分の知らないことが多いことに気づく。そこでまた地域への関心が深まり、新たな活動へのア

イデアが生まれる。今回のワークでは、参加者がこの協議体の仕組みについて、すでに感覚を掴んだ様子だった。結果的に、今回の参加者の多くが構成員として「協議体」に参画することを希望してもらった。

北中城村では、今後このメンバーと共に協議体の活動を発展させていく。今回

の勉強会で最も印象的だったのは、参加者の笑顔だ。地域に強く関心を持つ人たちが集まれば、楽しみながら、じっくりとこの活動を続けていくことができるだろう。協議体の地域への働きかけで、北中城村に多くの助け合いが創出されることを期待している。

者18名。

同町では2019年に勉強会を行い、助け合いに共感したやる気のあるメンバーで第1層協議体を立ち上げた。しかし、立ち上げから時間も経過し、生活支援体制整備事業に対する理解

も薄れ、行政担当者も変更となったことから、あらためて事業を学び直し、協議体の今後の進め方を考えるきっかけとしたとのこと、依頼を受けた。

同町の第1層協議体では、全体での情報共有や町全体

の課題の話し合いとともに、協議体委員が興味のある分野に分かれて部会を設け、

それぞれで話し合いを行い、協議体全体で共有しながら進めてきた。部会は、フー
ドドライブ、スマホ教室、ワークショップの3つがあり、それぞれ食を通じた集いの場づくりや食支援、コロナ禍でのオンラインでのつながりづくり、地域での助け合いの大切さの説明などを行ってきたという。また、今後は分科会形式ではなく、食を介した地域のつながりづくりを進めるために地域食堂を行いたいという声があり、協議体でモデル的に実施することを計画しているとのこと。その一方、委員の中では活動を実

施する上で、担い手不足や活動の費用に不安があるということだった。

財団の講義では、事業の概要とともに、同町の人口規模を踏まえ、小規模な自治体でも可能な活動の事例も紹介した。特に、協議体で取り組みを検討している地域食堂のモデル実施に伴い、地域食堂の事例を中心に紹介した。地域からの寄付や、食堂に来た子どもへの保護者からの協力、地域住民にボランティアを呼びかけることで、地域のために役に立ちたいと思う人の生きがいにもつながっていることを話した。また、食材については、子ども食堂同士のネットワークや地域か

らの食材の寄付などを含め、横のつながりで解決していくことも可能であることなどを紹介した。

これまでの部会活動を中心とした地域づくりの経験を生かして、コロナ禍も落

住民主体の地域づくりを広める再スタート 市民フォーラム開催

■山形県長井市

〔6月27日〕長井市の第1層SCより、「再度、市民フォーラムを行い、その後、研修会で助け合いを創出していきたい。また、コミュニティ協議会で第2層づくりを進めていきたい」とのこと

で、当財団に市民フォーラムへの協力依頼があった。2018年に市民フォ

ち着いてきた今、新たな地域への働きかけとして、地域食堂のモデル実施の検討を始めた同町の協議体。今後の展開に期待している。

（岡野 貴代）

ーラムを開いて盛り上がった長井市だが、その後コロナ禍となり、活動が停滞していたらしい。

フォーラムでは、まず市福祉あんしん課から、市の現状と課題、担い手不足などデータを使った詳しい説明、支え合いの地域づくりの必要性やSCの役割等に

6月27日、
長井市の市民
フォーラムでの
「助け合い見える
化チャート」の
様子



ついて説明があり、「市民参加がキーワード」と参加者へ呼びかけがあった。続いて、「支え合いの地域づくりを広げよう」と題して財団が講演。行政説明を受けて、地域は変化し制

度も変化していく中で、ますます気軽に「助けて」と言いにくい社会、家族機能が弱くなりご近所のつながりも弱くなった今、住民主体による家族のような支援やつながりの再構築が必要



であることを伝えた。これまでやってきた活動を生かしながら「点」ではなく「面」として多様な助け合いを広げるために、まち全体で推進する動きとしてSC・協議体の取り組みを伝え、他市町村の事例を紹介した。また、仕組みづくりも重要であるため、有償ボランティア、共生型常設型居場所、移動支援等の全国の事例を紹介し、「やってみたいことをやりませんか」と呼びかけた。

その後、齋藤環樹副市長と第1層SCの布施京子氏にも登壇してもらい、「助け合い見える化チャート」を行った。有償ボランティアには約6割の参加者が挙手し、「必要であり、やつ

てみたい」と関心が高かった。

その後、事例として2つの居場所の取り組みが発表された。1つは、コロナ禍でも気をつけながら住民の「やってみたい」の声を聞き、多様な取り組みを始めていた。もう1つは、市の補助で行っているミニデイサービス。30年も活動を続けている中で、の悩みも出され、さわやかインスタクターの加藤由紀子氏と一緒に助言した。

アンケートには、「有償ボランティアが増えたらよい」「居場所づくりは今後ますます必要になると思うが、高齢者だけ、障がい者だけ、子どもだけではなく、地域に密着したごちゃまぜ

の居場所づくりが理想。運営には費用とノウハウが「要」等、たくさん感想が寄せられ、「活動に参加し

たい」と記名した参加者も多数いた。これからの同市に期待したい。

(鶴山 芳子)

新任SC・行政担当者基礎研修会 講義と事例で基本を押さえ、 情報交換でつながる

■山梨県

【6月28日】新たに生活支援体制整備事業担当になったSCや行政担当者を対象に、山梨県で基礎研修会が開催され、当財団も協力。約40名が参加した。

最初に県担当の三井朝日氏から、県内の現状や地域包括ケアシステム、体制整備事業について説明があった。次に、「住民主体の地域づくりを広げよう」生活



支援コーディネーター・協議体の役割」として財団・鶴山から、助け合いの必要性(事業の意義)、行政と住民の協働とSCの役割と助け合いが生む効果、行政の覚悟について講演。また、同県南アルプス市SCの斉藤節子氏より、協議体立ち上げから9年間の経緯や工夫などについて。同市SCの小林陽一氏より、「SC

として活動する上で大切なこと」として発表があった。続いて「助け合い体験ゲーム」を行い、住民対象にゲームを行う際のいろいろなやり方を伝え、同県のさわかインストラクター塚田好子氏に補足のコメントをもらった。

次に、7グループに分かれてワークを実施。「住民に助け合いの必要性やSCの活動を理解してもらうための機会をどうつくるか、どんな方法・効果があるか」「第2層協議体構成員の適切な選出、第2層の圏域を決めるポイント等」などで、それぞれ違ったテーマで話し合い、全体で内容を共有した。

参加者は担当になってい



山梨県の基礎研修会の様子(6月28日)

年未満という人が多かったが、講義とグループワークを通じてたくさんの方の知恵を出し合い、参加者同士の間が生まれ、参加者同士のつながりが生まれた様子。名刺交換も行いながら、終了時には打ち解け合い、そして



情報・調査事業

調査政策提言プロジェクト

「第1回 助け合いの評価の勉強会」開催

〔6月20日〕当財団にて、「第1回 助け合いの評価の勉強会」を開催した。

助け合い活動は、その効果等をどう評価するかが難しい。生活支援体制整備事業などが推進する事業としての地域づくりが進む中で、その評価は、従来の事

て生き生きとした表情になつていた。財団からも「同じ山梨県で助け合いを広げる仲間として一緒に頑張っていこう」と呼びかけた。（鶴山 芳子、大方 彩友美）

業評価のように活動の回数など「数値」に重きが置かれてきているように感じられる。しかし助け合いは、数値で評価することによって逆に活動を潰してしまう危険性もある。一方で、公的財源が入っていると、まったく評価ができないとい

う話にすることもできない。そこで、財団として助け合い活動を推進するにあたり、何らかの評価に対する考え方を示したいと、助け合いの評価の勉強会を開催することにした。

出席者は、委員としてささえあいのしくみづくりアドバイザーの河田瑋子氏、山梨県南アルプス市第1層SCの斉藤節子氏、認定NPO法人コミュニティ・サポートセンター神戸理事長でさわやかインストラクターの中村順子氏。財団から清水肇子理事長、鶴山芳子常務理事、岡野。事務局として株式会社日本能率協会総合研究所。ほかに、財団職員6名がオブザーバーとして参加した。

第1回ということで、日頃から活動現場で感じている評価に対する考え方について、参加者に自由に意見を出してもらった。参加者からは、協働で進める意識の重要性、助け合いを通した個人の気持ちの変化の見える化など、評価の考え方の根本となる意見が挙がった。

第2回は8月4日の予定。今回出された意見を基にポイントを整理し、具体的な評価方法についても議論を深めていく。また、今後は勉強会の内容を踏まえ、必要に応じて有識者による検討会を開催し、評価の考え方をまとめる予定である。

（岡野 貴代）

地域づくり加速化事業

約50名のアドバイザーが伴走支援に向け目的共有

【6月29日】厚生労働省の

「令和5年度地域づくり加速化事業」のアドバイザー約50名を対象とした事前説明会がオンラインで開催され、当財団から老健局主導型と厚生局主導型のアドバイザーとして協力する澤、鶴山、岡野が出席した。

厚生省老健局認知症施策・地域介護推進課地域づくり推進室長補佐の岸英二氏からの開会あいさつに続き、アドバイザーが紹介された。議題は、(1)地域づくり加速化事業のコンセプト(つながる・知る・うまれる)について、(2)地域づくり加速化事業について、

(3)令和4年度アドバイザー等からの助言、(4)質疑応答／意見交換、(5)その他。

昨年度から始まったこの事業は、地域包括ケア推進を目的にブロック別研修会や全国研修会の開催と、市町村への伴走支援事業を行うことになっている。次年度(令和6年度)には第9期介護保険制度改正があり、その中で介護予防・日常生活支援総合事業(総合事業)の充実に取り組むことが挙げられているが、厚生省ではこの4月から、財団の清水肇子理事長も構成員を務める、総合事業の充実に向

けた検討会を開催し、今後の取り組み方を議論している。また、具体的な支援として地域づくり加速化事業に取り組んでいる(鶴山が運営会委員)。昨年度も全国研修やブロック別研修会、そして24市町村での伴走支援が行われ、本誌でも担当地域について報告してきたが、今年度は伴走支援の対象を48市町村と倍増し、推進を図る予定。

説明会では、事業のコンセプトや内容について、厚生労働省や事業を受託している株式会社日本能率協会総合研究所から説明があった。

また、昨年度のアドバイザー3名から今年度のアドバイザーへの助言が行われ、

鶴山からは、昨年度の支援を通じた気づきとして「地域づくりは住民が主役、住民の声を聞くことが重要であること」を実感した。ことや、3回にわたって行う支援のイメージを伝えた。

「教えるのではなく、引き出す」ことが重要とのこと、国、厚生局、都道府県、アドバイザーがチームとなり、主体である市町村の多様な立場の皆さんと同じ方向を見ながら、気づきを促し、主体的な取り組みにつながるように関わっていきたい。

(鶴山 芳子)





高齢社会NGO連携協議会

「2022年度事業報告定時総会」開催

〔6月19日〕高齢社会NGO連携協議会（高連協）「2022年度事業報告定時総会」をウェブ会議形式で開催した。全22会員団体中11団体が参加、欠席11団体より委任状提出を受け、公益財団法人社会教育協会理事長の黒水恒男氏を議長に総会を行った。決議議案は、

第1号議案の事業報告では、

①政策提言事業は、「高齢女性の働き方と社会参加」を研究提言する事業として、高齢社会をよくする女性の会より研究報告書と研究レポートの提出を受けた。②手上げ事業は、社会教育協会より「超高齢社会における社会教育」特に団塊の世代の社会参加をどう図るか」と題した研究事業の報告。当財団からは「企業OBに地域社会の助け合い活動へ参加をうながすための事業」として大阪、

神奈川、東京と続いた「いきがい・助け合いサミット」の目的と最終提言に至った経緯の報告、高連協の参加応援、協力への感謝を伝えた。

第3号議案は、今年3月30日付で勇退した堀田力、樋口恵子両共同代表の後任として、大内尉義氏（一般社団法人日本老年医学会名誉会員・元理事長、東京大学医学部名誉教授）と、当財団の清水肇子理事長が推薦された。

議案3件は全て全会一致で承認された。新共同代表からは、「前共同代表の意志を受けて高連協の次なるステップへ、各会員団体と連携しながら強化していきたい」とあいさつがあった。



「ふくしま避難者交流会」

第2回打ち合わせ

〔6月30日〕「ふくしま避難者交流会」第2回打ち合わせを、福島県避難地域復興

局、東京都復興支援対策部および福島県から委託を受けているNPO法人医療ネットワーク支援センターと行った。同交流会は、福島県から首都圏に避難されている方々を対象に、交流の場の提供、復興に向けた取り組みに係る情報の提供および相談などを行うことを目的としたもので、例年、福島県が主催し当財団と東京都が共催して開催してきた。

今年については、震災から時間も経過していることから、あらためて交流会の目的を再確認し、避難者の皆さんに対する福島県からの情報提供に加えて、交流会が被災者の皆さんにとって心のよりどころとなるよう、参加して楽しめる交流の場を提供すべく準備することとなった。開催日は11月18日(土)、場所は東京

国際フォーラムとする。今後内容を詰めていくが、福島県と会場をオンラインでつなぐことも検討する予定。

(内田 信幸)



事務所 より だより

●ボランティア・ベンダー協会を通じて飲料の売り上げの一部が寄付される、当財団事務所の自動販売機。利用をさらに促進しようと最近、購入できる飲料が一部見直されたが、社会参加推進リーダーのTさんは「ペプシ」をリクエスト。聞けば学生時代、部活帰りの渴きを癒した思い出の味なんだとか。導入されて以降は、毎日欠かさずペプシを購入、「心なしか当時と味の違いを感じるの、真心と愛情が隠し味だからかな」とTさん。おいしい飲み物を買って寄付にもなるこの仕組み、もっともっと広がってほしいね！

第2回 樋口恵子賞 募集

「高齢社会NGO連携協議会」前共同代表で名誉顧問の樋口恵子さんが理事長を務める「NPO法人高齢社会をよくする女性の会」が、「第2回 樋口恵子賞」への応募を受け付けています。

老若男女の幸福な超高齢社会の創造と、次世代の輝く未来を目指して活動する個人または団体を応援する賞です。高齢者サービス、世代間交流、子育て支援その他の活動事例を募集しています。ぜひご応募ください。

<応募締め切り> 8月31日(当日消印有効)

詳しくは、高齢社会をよくする女性の会「樋口恵子賞」実行委員会まで

電話 (03) 3356-3564 (月・水・金) FAX (03) 3355-6427

〈メール〉 wabas@eagle.ocn.ne.jp 〈HP〉 <http://wabas.sakura.ne.jp/>

今年も感謝の気持ちで 思恩忌夏



統括広報プロジェクト

東京のお盆の時期の7月12～14日、当財団にご遺贈いただきました故人の皆様にあらためて感謝して、そのご遺志を再確認する「思恩忌夏」を執り行いました。

例年通り、財団の事務所前にご遺贈いただいた方々のお写真を飾り、花をお供えました。

また、初代会長の故石川忠雄さんをはじめ、当財団の活動にご尽力いただいた方々のお写真も、花と一緒に飾りました。

清水肇子理事長はじめ、財団スタッフ一同で故人の皆様のご遺志を思い、感謝の気持ちとともにご冥福を祈りました。
(小野島 朝子)

<ご遺影を飾らせていただいた遺贈者の方>

故山路鈴子さん、故沢村貞子さん、故小村忠男さん、故関美江さん、故松岡廣子さん、故石河刃雄さん、故石河豊さん、故大友恭子さん、故齋藤規子さん、故小島正治さん、故平栗稔さん、故小高根美那子さん、故原田愛子さん、故藤原俊雄さん、故遠藤利枝さん、故伊藤和子さん、故森川秀子さん、故近持弘子さん、故須永道子さん、故綱川光子さん、故橋本武義さん、故近藤常子さん、故天野郁子

さん、故國吉眞惟さん・蓮子さん、故坪川速子さん、故小峰勝野さん、故伊藤春子さん、故澤谷静枝さん、故安田多栄子さん、故設楽千恵子さん、故和田和子さん、故後藤富士雄さん、故小林八重子さん、故駒井雅子さん、故高橋良三さん、匿名の方



みんなの広場

村田さんのエッセイ
楽しく読んでます

西岡 定美さん

(地域包括支援センター職員)

岐阜県

『さあ、言おう』、包括の職員16名全員に回覧しています。皆それぞれ目を通して、感じる部分があるだろうと思います。

エッセイ「老いの暮らしを創る」は、村田幸子さんご自身の施設での暮らしや思いをユーモアある表現で綴ってください、楽しく読んでいます。

これからも編集・発行の継続をお願いします。楽しみにしています。

時に皆さんで感じたことを語り合ってみてください。

越境、
どんな手法が…?

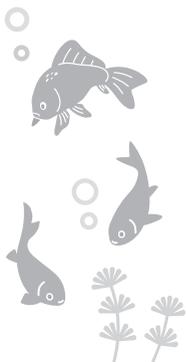
高橋 三夫さん

埼玉県

5月号の袖井孝子さんのエッセイ「会社人間から地域人間へ」を読みました。

「越境」させるために、どんな手法があるのだろうか？ 40年も「タテ社会」で生きてきた人間を変えさせるには…。

体験こそが一番。現役時代から地域につながる働き方を企業にも働きかけましょう！



投稿募集

『さあ、言おう』は皆様の声を社会につなげる問題提起型情報誌です。ぜひ皆様の声をお寄せください。

送付先

〒105-0011
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階
公益財団法人さわやか福祉財団
『さあ、言おう』編集部宛
FAX: (03) 5470-7755
E-mail: pr@sawayakazaidan.or.jp

『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人
年会費

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

法人
年会費
(1口)

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の優遇措置が受けられます。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の優遇措置が受けられます(さわやか福祉財団は所得税の税額控除対象の公益法人です)。

一般ご寄付を
いただく場合の
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856※

三井住友銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号2754574

みずほ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3383326

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

※払込手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。

*お問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。
電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp

表紙絵から

はり絵・池田げんえい

「燃夏」 弘前 (青森)



編集後記 ●「巻頭言」(P2～)と裏表紙でご紹介のとおり、10月に「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2023」を開催します。ご参加お待ちしております。●「新・ひとりごと」は写真家の大石芳野さんです。ベトナム、カンボジア、アフシュビッツ、広島、長崎、沖縄など戦禍に見舞われた世界各地を訪ね、そこに暮らす市民の姿を取材して戦争とは何かを訴え続けています。写真はアフガニスタンの少女、米軍のクラスター爆弾の地雷化によって両足を失い、母親は即死しました。市民生活を支える平和の尊さを改めて考えたいものです。

助け合いを
広げよう!



大石 芳野



©大石芳野

戦争がいかに理不尽か。

私たちは大いに反省をして21世紀を迎え、

国家間の戦争を避ける努力をしてきた…はずだった。

ところが、「プーチンの戦争」が、

ウクライナの人びとを負の歴史の彼方へと逆戻りさせ、

世界は不安に陥った。

戦争はその人の生涯を苦しめ続ける。

今、私たちにできることは、なに？

●写真家

コロナ禍最中の昨年、ロシアの「プーチンの戦争」が起これ、以降、落ち込みの日々。コロナ禍で撮影ができなくなり『わたしの心のレンズ 現場の記憶を紡ぐ』（集英社インターナショナル・新書）を上梓した。拙展『戦世をこえて』を8月20日まで富山県高岡市「ミュゼふくおかカメラ館」で開催中。

（お楽しみ）8月号

通巻360号 2023年8月10日発行
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい

取材協力 七七舎

イラスト すずきひさこ

レイアウト 菊池ゆかり

印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子

発行元 公益財団法人さわやか福祉財団

〒105-0011

東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階

Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755

E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp

<https://www.sawayakazaidan.or.jp>

Printed in Japan



いきがい・助け合い オンラインフェスタ

すべての人が幸せに暮らせる社会へ 2023

3回の「いきがい・助け合いサミット」に続き、この秋、さわやか福祉財団では「いきがい・助け合いオンラインフェスタ」を開催します。

計11の個別テーマを設定、「学ぼう編（事前収録）」「語ろう編（ライブ配信）」で、助け合いの推進や地域共生社会の実現に向けて皆で学び合いましょう！

開催時期：2023年10月2日（月）～10月16日（月）

開催方法：完全オンライン配信形式

プログラム：オープニングフォーラム、個別テーマによる「学ぼう編」「語ろう編」、クロージングフォーラム 等

申込受付：2023年8月15日（火）開始

参加費：1000円（税込） ※地域活動応援のため、いただいた参加費と同額を当財団の「地域助け合い基金」に拠出します。

主な個別テーマ

- ◆ 生活支援コーディネーターや協議体の取り組み方
- ◆ 都道府県の支援、助け合い評価の取り組み方
- ◆ 共生型常設型居場所の広げ方
- ◆ 生活支援（有償ボランティア）や移動支援の広げ方
- ◆ 孤立者への地域支援の取り組み方
- ◆ 認知症の方の社会参加、シニアの社会参加の取り組み方
- ◆ 助け合い活動のケアプランへの取り入れ方

※「学ぼう編」のみのテーマもあります。

プログラム、お申し込み方法等の詳細は、同封のチラシ、当財団ホームページをご覧ください。

皆様のご参加をお待ちしています！